Color Science Association of Japan

B4-2

染髪に対する意識と自己概念の関連－服飾系大学と非服飾系大学の比較－

Interest of Hair Coloring - Relationship between Self-Perception and Majoring in Fashion -

毛利　暁子　Akiko Mori　早稲田大学大学院人間科学研究科
Graduate School of Human Sciences, Waseda University
齋藤　美穂　Miho Saito　早稲田大学人間科学学術院
Faculty of Human Sciences, Waseda University

キーワード：染髪，自己概念，服飾系大学
Key words: hair coloring, self-perception, and major in fashion

1. 研究背景

毛利・齋藤(2005)において，美大生と非美大生では肌色と髪色の異なる男性の顔画像を評価する際の因子構造が異なることが明らかとなった．

また，齋藤・毛利(2005)では，染髪に対する意識に関して，美大生は染髪を肯定的に受け入れ，非美大生は染髪を否定的に受け入れることが明らかとなった．また，日常の染髪に対する意識が就職活動において黒に染め直すか否かの判断にも影響を与えていた．

このことから，染髪行為には染髪する者の嗜好や立場が関わっていると言える．

2. 目的

研究背景から，染髪行為は他者に与える印象を操作する行為であると言える．また，社会的自己意識の高い者は低い者より衣服に対する関心が強いとの報告もある (Solomon & Schopler, 1982)．そこで，服飾系大学と非服飾系大学の比較を通して，染髪率の高い女性を対象に、自己概念と染髪に対する意識の調査を行うこととする．

3. 方法

3-1. 被験者

文化女子大学の学生107名（平均年齢19.2歳，標準偏差 .54)，早稲田大学人間科学部の女子学生 107 名（平均年齢 19.8 歳，標準偏差 1.2)．以下，文化服飾大学の学生を服飾系大学生，早稲田大学の学生を非服飾系大学生と記述する．

3-2. 材料

・自己概念を測定する質問紙

長島ら (1967) の SD (Self-Differential)尺度の大学生用 (FormA) を使用した．この尺度は，「きちんとした-だらしのない」などの 47 の修飾語対から構成されている．

・染髪に関する意識の調査

毛利・齋藤(2005)で自由回答のカテゴリ分けをしたカテゴリ内で代表的な記述をもとに項目を作成した．例えば，染髪に対する意見の回答からは，「外見の操作」，「内面の操作」，「個人の自由」，「髪の痛み」の 4 カテゴリを得た．それらカテゴリ内の代表的な記述をもとに染髪意見に関して 15 項目、染髪意見に関して 17 項目、あわせて 32 項目を作成し，5 件法で回答を求めた．

3-3. 手続き

被験者は、自己概念の質問紙に回答後、染髪に対する意識調査に回答した。

自己概念の測定と染髪に関する意識調査の結果に対し因子分析を行う．次に，自己概念の因子得点を独立変数，染髪意識調査の因子得点を従属変数として重回帰分析を行い，自己概念の染髪意識に対する関与を検討した．

4. 仮説

服飾系大学と非服飾系大学では，自己概念と染髪に対する意識の関連の仕方に違いが見られると仮定する．また，服飾系大学の学生の方が身体を着飾ることに関心が強いと思われるため，自己概念と染髪に対する意識の関連性が強いと思われる．

5. 結果

5-1 自己概念の因子分析

両大学の尺度の得点に対して因子分析（最小二乗法，バリマックス回転）を行った．抽出された因子から固有値1以上を基準に因子を抽出した．

・服飾系大学　因子分析の結果 14 因子が抽出され，累積寄与率が 50%に近くスクリープロットでの因子間の変化の見られなかった部分を基準として，7 因子を採用した．各因子の因子付加量の高い順に「誠実性」(3.779)，「明朗性」(3.689)，「積極性」(3.020)，「情緒安定性」(2.445)，「強靭性」(2.345)，「穏和」(2.125)，「慎重派」(1.904)と命名を行った．

・非服飾系大学　服飾系大学と同様の基準で 8 因子を採用し，命名を行った．因子付加量の大きい順に，「明朗性」(6.992)，「誠実性」(3.321)，「律儀性」(3.070)，「意欲性」(2.797)，「堅実性」(2.132)，「理知性」(2.124)，「情緒安定性」(2.096)，「強靭性」(1.586) と命名を行った．

NII-Electronic Library Service

Color Science Association of Japan

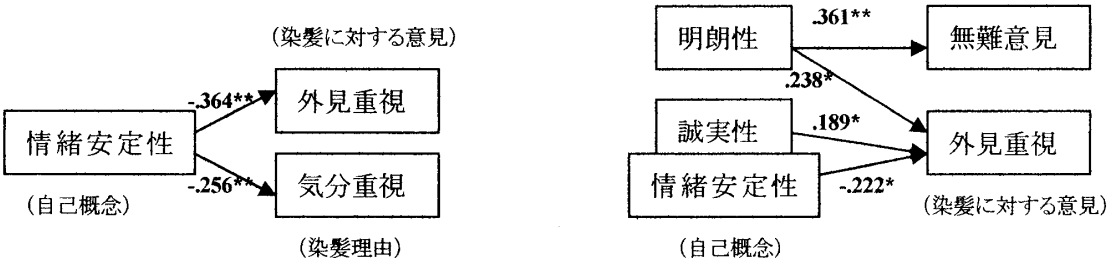

図 1.「自己概念」と「染髪に対する意見」の重回帰分析の結果　**: p<.01, *: p<.05

5-2 染髪に対する意識の因子分析

・服飾系大学 「染髪に対する意見」では抽出された 5 因子すべての因子を採用し，各因子に「外見重視」(15.52)，「臨機応変」(8.93)，「健康考慮」(6.41)，「無関心」(5.33)，「髪いたわり」(4.48)因子と命名した．「染髪理由」では抽出された 4 因子すべてを採用し，各因子に「色重視」(17.37)，「必要に応じる」(10.14)，「気分重視」(9.84)，「明るさ重視」(9.41)因子と命名した．

・非服飾系大学 「染髪に対する意見」では抽出された 5 因子を採用し「おしゃれによる気分転換」(16.66)，「無難意見」(10.12)，「外見変化」(8.28)，「放任」(7.31)，「髪いたわり」(6.51)因子と命名を行った．「染髪理由」では，同様に 5 因子を採用し「明るさ重視」(15.81)，「気分重視」(12.88)，「地毛嫌い」(11.11)，「外的要因」(10.64)，「軽量感重視」(7.64)と命名をした．

5-3 自己概念と染髪に対する意識の重回帰分析(図1を参照のこと)

・服飾系大学 染髪の意見の外見重視因子と染髪理由の気分重視因子に関して自己概念の情緒安定性因子と有意な関係が見られた．情緒安定性因子の外見重視因子に対する標準化係数は-.364 であり，気分重視因子に対しては-.256 であった．このことから，自己概念の情緒安定性の低さが染髪意見の外見重視因子と染髪理由の気分重視因子に影響を与えており，その関係性は外見重視因子と情緒安定性因子の組でより大きいことが明らかとなった．

・非服飾系大学 染髪に対する意見の外見重視因子が自己概念の明朗性(.238)と誠実性(.189)と情緒安定性(-.222)の 3 変量と有意な関係で，無難意見因子が明朗性(.361)と有意な関係であった．よって，自己概念の明朗性の高さが染髪に対する意見の外見重視因子と無難意見因子に影響を与え，さらに誠実性の高さと情緒安定性の低さが加わると外見重視因子に影響を与えることが明らかとなった．

6. 考察

自己概念の測定で抽出された因子では，服飾系大学で誠実性因子，非服飾系大学で明朗性因子の負荷量が高かった．

重回帰分析では，服飾系と非服飾系の両大学の女子学生で自己を情緒不安定と捉えている者は，染髪とは外見を変化させる為のものであるという意見を持つ傾向にあることが明らかとなった．

また，服飾系大学では自己を情緒安定性が低いと捉えている者が染髪とは気分を変化させる行為だと考えていた．一方，非服飾系の女子大学生では自己を明るい性格だと捉えている者は，染髪とは外見を変化させる行為であり，似合えば良いという意見を持つ傾向があり，自己を誠実だと捉えている者が染髪とは外見を変化させる行為であると考えていた．

これらのことから，服飾系大学は自己概念の特定の部分と染髪に対する意識との関連性が強く，仮説と一致する結果となった．服飾系の大学生は自己の感情的な部分を染髪行為等の身体を着飾ることで表出している傾向が強いと考えられる．

今後，自己の捉え方や自己を表現する事に関して服飾や美術への関心がどのように関わっていくかの研究が必要となる．

参考文献

齋藤美穂・毛利暁子 2005 男性顔の髪と肌の色の認知－美大生と一般大学生の比較－日本色彩学会誌，vol.29, supplement, 66-67.

毛利暁子・齋藤美穂 2005 染髪に対する社会的態度 －美大生と一般大学生の染髪理由－ 日本心理学会第 69 回大会発表論文集，73.

毛利暁子・齋藤美穂 2005 大学生の染髪に対する意識 －自由回答のカテゴリ分けによる等質性分析－ 日本社会心理学会第回大会発表論文集，208.

長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・齋藤耕二・堀洋道 1967 自我と適応の関係についての研究(2)－Self - Differential の作製 東京教育大学教育学部紀要，13, 59-83.

Solomon, M. R., & Schopler, J. Self-consciousness and clothing. Personality and Social Psuchology Bulletin, 1982, 8, 508-514.

NII-Electronic Library Service